



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「Very good departure、また会う日まで」②

実はさくらももこさんの訃報のほかに、もう一つショッキングな知らせがメールで送られてきた。わが輩の勉強会仲間の訃報である。インド出発(8月30日)の一週間前のことであった。翌日あわてて弔問に伺った。

交通事故で老齢の母親を残して逝ってしまった。

「あんなに神さま、神さまと言っていたのに神さまは何の役にも立たなかった」

老母のことばが胸に刺さった。

神さまやグルの写真などを処分してしまう。ついては気に入ったものがあれば遺品として持ち帰って下さいと老母が言った。わが輩は2枚の写真を選んだ。ヒマラヤ山中にある神秘的なチャンドラ・タール(月の湖、標高4,100m)で撮ったものである。

あのときの夜(1999年)、わが輩はテントの中で苦しくて眠れなかった。翌朝元気になったものの高山病の者が数名いたので、わが輩が先導して早めに下山することになった。馬で下山することになったが、どういわけかわが輩の馬だけがない。馬の尻を一生懸命追いかけたが、馬の脚にはかなわない。徐々にその差が広がり、とうとう見失ってしまった。陽が沈み暗くなってきた。遠くで犬か狼がうおーんと吠えているのがきこえた。夜道を間違えたら狼の餌食かもー。やっとジープのところまでたどり着いたが、今度は断崖絶壁の悪路を猛スピードで走り抜けていく。眠たいのと諦めで茫然と谷底を見ていた。二台に分乗したが、一台が追いかけてこない。しばらくジープを止めてまっていたがその姿が見えないので引き返すことにした。

(おーMy God!)

溪谷側に脱輪していたのを発見したのである。運転手もわが仲間も固まったまま動かないことマネキン人形のようなのである。恐怖だ。微動だにすれば谷底にジープごと墜落だ。

そこでわが輩はゆっくり近づき声をかけた。

「なにしてるの？」

マネキン人形の顔が少し緩んだ。

「なぜ、下りないの？」

怪訝な顔をするので、わが輩は車のドアを開けて下りるように促した。確かに谷側に脱輪していたが、側溝に脱輪しているだけで谷底に落ちるような状況ではなかった。暗闇という恐怖が彼らの心を縛っていた。事実が見えない恐怖だ。あとで笑いのネタになった。

翌日わが輩はヒマラヤ温泉（標高 2,000m）につかりリラックスしていた。そこにもう一人の女性が急遽下山してきた。交通事故で亡くなった勉強会仲間の彼女であった。

「コンタクト・レンズが眼球にくい込んだ！」

ところが、温泉の町マナーリーには眼科医がない。クルーなら眼科医がいるというので車をチャーターして 40 キロ程下った。約 1 時間半ほどである。途中で彼女がシクシクと泣き出した。

「親からもらった大事な身体を傷つけてしまった」

まるで少女のような涙である。

眼科医院といっても長屋の二階にある小汚い部屋である。今医師はいなから探してくると看護師が出かけて行った。しばらくして、その辺にいるおじさん風の男が現れた。白衣をきるでもなく、愛想一つない男だ。ヘラのようなもので眼球を撫でている。めり込んだコンタクトをはぎ取ろうとしているのか。わが輩は痛々しくて見ていられないので視線をそらした。

「コンタクトは無い」

めり込んでいない、と無愛想に言った。

「まちががなく、左眼にコンタクトがめり込んでいるの！」

彼女がヒステリックに叫んだ。

わが輩は思った。とんでもないヤブ医者だ。次の病院を探さなければ……。

ヤブ医者は無表情で、検眼用のフレームを彼女にかけた。

左眼を閉じて

「右裸眼である文字が見えるか？」（見える）

右眼を閉じて

「左裸眼である文字が見えるか？」（見えない）

左右のフレームに交互にレンズを入れ替えはじめた。

次いで、左のフレームに“度数がある”レンズを入れて

「左眼である文字が見えるか？」（見える）

そこでヤブ医者は彼女に問うた。

「なぜ、左眼で見えたのか」

彼女はそこではっと気づいた。

読者諸氏よ。この流れを理解できただろうか。もし左眼にコンタクト・レンズがめり込んでいたら、裸眼で見えたはずだ。ところが度数のあるレンズを入れたら文字が見えた、ということはコンタクトが無いということになる。医師の権威をもって「無い！」と言ってしまえばそれで済んだ話である。ここでわが輩はインド哲学を学んだような気分になった。実に見事な論理方法だ。ヤブ医者どころか名医にして哲学者である。

宿に帰る途中、彼女は無邪気に喜んでいた。20 年程前の出来事だがこの件以来親しくなった。

人は「無い」ものを「ある」と誤解する。そこに執着がうまれる。寄り道になるが「ある」ものを「無い」と誤解した話を次回してみようではないか。